



NEWSLETTER

～ 水を守り 湖を救う ～

公益財団法人 国際湖沼環境委員会(ILEC)
本ニュースレターには、英語版もございます。

WLC16開催国インドネシアにおける湖沼の現状 (雄大なトバ湖など)



第16回世界湖沼会議(WLC16: BALI、2016年11月7～11日)の開催が迫ってきました。開催国インドネシアには大小合わせ1,500以上の湖沼が散らばっていることは前回お話ししましたが、いずれも各地域で水力発電や生活・農業・産業用水としての利用、洪水被害の緩和、観光産業の振興など、人々の暮らしと社会経済の発展を支えています。他方、多くの湖沼に共通する課題も少なくありません。富栄養化や、流出土砂の堆積問題をはじめ、特に人口が過密化する都市部では産業・生活排水による汚染、地方部では農業排水や過剰な漁業による生態系の悪化などが見られます。こうしたことは万国共通ではありますが、そこに暮らし事業を営む利害関係者が、どれだけ自分たちの水源の持続可能な利用を考え実際に行動を起こしているかは、各国の情勢などによりばらつきがあります。ILECはWLC16の準備において幾度かインドネシア湖沼の現地調査を実施してまいりましたが、残念ながらこの点において同国は未だ発展途上であるといった印象があります。例えば、首都ジャカルタへの流入河川であるチタルム川は、その上流バンドンの工業廃水や土手に不法に投げ込まれたゴミなどにより、世界で最

も汚い川の一つに挙げられるほど深刻な汚染が進んでいます。



チタルム川上流に不法投棄されたゴミ

こうした中、インドネシア政府は優先的に15の湖沼を指定した保全政策を作成するなど、悪化する水環境への対策を進めています。指定を受けた湖沼はいずれも同国が抱える湖沼流域の現状を良く映し出していますので、WLC16に参加を予定されている方はできればそのうちの一つでも、会期の前後に足を延ばされてはいかがでしょうか。今回はお勧めの立ち寄り先として、そのうちの3湖沼をご紹介します。

■トバ湖：マレー半島から西にマラッカ海峡を隔てたスマトラ島北部にあり、面積(約1,130平方キロメートル)、水深(最深部で約530メートル)ともにインドネシア最大です。東南アジアでも雨季の

トレンサップ湖(カンボジア)に次ぐ規模を誇り、カルデラ湖としては世界最大級とされ、国外でも重要な巨大湖沼の一つとなっています。山々に囲まれた湖の中心部にはサモシール島という有人の島があるほか、湖岸から湖底にかけて急激に深くなっている地形が特徴です。そのため表面的には湖水の透明度も高く見えますが、人口が集中する地点では富栄養化が進んだ湖面にホテイアオイの群生や、湖岸への家庭ゴミ不法投棄による水質汚染が見られます。休暇シーズンには国内外からの観光客で賑わいますが、漁村や農村が点在する流域には全体的にのどかな暮らしぶりが息づいており、湖上には対岸からの農産物や商用の物資を運ぶ人々を乗せた連絡船が頻繁に行き交っています。



トバ湖

なお、スマトラ島ではパーム油と天然ゴムのプランテーションが盛んで、トバ湖へ

今号のトピック

- WLC16開催国インドネシアにおける湖沼の現状
- 琵琶湖・トラジメノ交流会を開催
- 流域政策研究フォーラム：国内湖沼関係者の連携強化を目指して
- ILBM-ESSVAワークショップをキスムで開催
- 第12期ILEC科学委員会 始動
- 「湖沼と貯水池」最新巻のご紹介
- 科学委員会便り(特別編)
- 元JICA研修員からの便り(モロッコ)
- ILECの活動概要(2015年度下半期)
- さくらサイエンスプラン交流事業の実施
- 世界に羽ばたけ、びわっこ大使! ②
- ご寄付・ご協力ありがとうございます!

の最寄空港があるメダン近郊にもこれらの密林が広がっています。両資源ともにアジア屈指の輸出货量でインドネシアの経済を大きく支えています。プランテーションでの精製は深刻な水質汚染源となるだけでなく、いずれの樹木も十数年で資源採取効率が低下し長くても25年程度で再植林を要するため、使い終わった後の木材をバイオマスにするなど排水処理と資源の有効利用が課題となっています。トバ湖周辺にもプランテーション開発の波が迫りつつありますが、未だ手つかずの自然も多く、周辺に遺跡や先住民・バタック族の家屋も残るトバ湖は一見の価値があります。なお、事前に入手できる現地への旅行情報は限られていますので、治安対策も含めツアーなどの利用をお勧めします。

■**バトゥール湖**：バリ島北西部に位置する面積約16平方キロメートル、最深約88メートルのカルデラ湖で、WLC16の会場からは日帰りも可能です。山岳地の奥深くにあり、現地住民の暮らしは決して豊かではありません。一部の観光産業のほかは灌漑農業と漁業で人々は主に生計を立てており、農業排水や囲い網養殖池



バトゥール山とその裾野に佇むバトゥール湖

の増加が問題となっています。トバ湖ほどの規模はありませんが、バトゥール山の麓に湖を望むパノラマは必見です。同湖については前号の特集記事でも触れていますので、そちらも合わせてご覧ください。

■**ラワペニン湖**：中央ジャワにあり、面積約25平方キロメートル、深さは平均4メートル（最深部でも14メートル）と浅く、比較的小規模な火山性構造湖です。先の2湖沼のように観光地化されているわけではありませんが、地元住民に憩いの場として親しまれ、漁業のほか湖底から採掘した泥をキノコの肥料として販売するビジネスも成り立つなど、人々の生活を支えています。こちらでもホテアオイが過剰発生しており、刈り取った茎を乾



ラワペニン湖の湖岸に群生するホテアオイとその刈り取られた茎の束

燥させ工芸品して売るといった有効利用も行われていますが、その割合は一部に留まるため駆除対策としては限られた効果しかありません。

同湖を視察先にお勧めする理由は、その滞在拠点となる古都ジョグジャカルタにあります。ジョグジャカルタの魅力は何と言っても遺跡巡りで、空港近くにあるプランバナン遺跡や世界三大仏教遺跡のボロブドゥール寺院遺跡（いずれも世界文化遺産）に立ち寄り、その先にあるラワペニン湖へ向かうルートがお勧めです。



ボロブドゥール寺院遺跡群

以上の3湖沼はいずれも文化や宗教が少しずつ異なる地方にあります。例えば、ヒンドゥー教が大多数を占めるバリ島で会議に出席後、トバ湖があるスマトラ島北部へ渡ればキリスト教が主流であるため教会のある街並に一変しますので、インドネシアの多様性を体験することができるのではないのでしょうか。なお、現在WLC16の参加登録（無料）、および論文投稿を公式サイト上（www.wlc16bali.org）で受付中です。締切はいずれも6月7日（火）となっております。たくさんのご参加、お待ちしております！

WLC16の最新情報は上記公式サイトをご確認ください。また、日本語の情報はILECの公式サイトにて随時更新中です。

琵琶湖・トラジメノ湖交流会を開催

2015年11月19日、滋賀県の助成を得て「琵琶湖・トラジメノ湖交流会」を開催いたしました。この交流会は、2014年9月にイタリア・ペルージャで開催された第15回世界湖沼会議（WLC15）において、琵琶湖とトラジメノ湖で活動するNPO関係者等が出席した地域政策フォーラムをきっかけに生まれた両湖の交流をフォローしシェアすることを図るため、ペルージャの関係機関とインターネットを通じた電話会議として開催したものです。当日はイタリアでのフォーラム参加者の他、WLC15をきっかけに協定が締結された滋賀県立大学およびイタリア国立ペルージャ外国人大学の留学生や学生、また、スーパーグローバルハイスクールの指定を受けている滋賀県立守山高等学校からも参加いただき、互いの湖での活動について発表や意見交換を行っていただきました。交流会後、参加したイタリア人

留学生からは、「湖の問題を超えた気付きと学びのある有意義な会議であった」との感想をいただきました。



流域政策研究フォーラム: 国内湖沼関係者の連携強化を目指して

2016年1月26、27日に滋賀県大津市にて流域政策研究フォーラムを開催いたしました。ILECはこれまで、流域ガバナンスに関するこの種のフォーラムを関係大学の共催を得て幾度か開催してきましたが、今回は統合的湖沼流域管理(ILBM)の概念も導入しつつ、2014年の水循環基本法制定後の国内湖沼の具体事例を通し流域管理の現状を確認・検証するという視点で開催しました。中村正久教授(滋賀大学)に基調講演、平山奈央子助教(滋賀県立大学)に議事進行をいただき、環境省、全国の地方自治体および学術機関より流域政策に携わる専門家、事業担当者など30名近く

の方々にお集まりいただきました。

1日目は湖沼法指定の琵琶湖(滋賀県)と霞ヶ浦(茨城県)をはじめ、非指定ではありますが水質保全や自然再生保全に取り組む三方五湖(福井県)、河北潟(石川県)、猪苗代湖(福島県)および佐鳴湖(静岡県)から各々の流域管理における事例発表を行っていただきました。また全体討議では水循環基本法を意識した健全な水循環のための課題などについて意見交換を行い、2日目には琵琶湖南湖の視察を実施しました。参加者からは「他の湖沼の事例について学ぶ良い機会になった、今後もこうしたネットワークの場には参加したい」などの感想



をお寄せいただき、同フォーラムは盛況の内に終了いたしました。2018年には茨城県での世界湖沼会議の開催を控えていることもあり、今後も国内流域関係者間の情報共有と連携を進めるため、こうした議論と交流の場を継続していきたいと考えております。

ILBM-ESSVAワークショップをキスムで開催

統合的湖沼流域管理(ILBM)推進のための手法である生態系サービス共有価値アセスメント(ESSVA)の進め方について討議すべく、ILBM-ESSVAワークショップが2015年11月24～25日にケニアのキスムで開催されました。ESSVAはILECが提唱する新たな参加型の手法で、流域における生態系サービスの現状や流域管理の課題を流域の実情(ESFP)と自分たちの認識(ESPP)の両面から評価することによりILBMプラットフォームプロセスを展開していくものです。今回のワークショップには同国や州の省庁、大学などの研究機関、NGO、国際機関(ビクトリア湖流域委員会、国連環境計画、世界野生動物基金)などから25名の専門家が参加し、広範な視点から意見を交わしました。

先立って3つの湖沼(バリング湖、ナクル湖、ビクトリア湖/ニャンザ湾)でESPPのパイロット調査が実施され、ワークショップではその結果が報告されました。ESPPの結果から、各流域の住民は自分たちの資源開発活動の大きさをよく理解しているものの、こうした活動が流域生態系サービスの持続性にどのように影響しているかについては理解が未だ不十分であると

判断されました。ESPPの結果は専門家が用意したESFPの結果と比較され、そのギャップが議論されました。これらは将来の活動計画作りの指針を与えてくれるものです。参加者はワークショップでの議論を通じ、ILBM-ESSVAがケニアにおける湖沼流域ガバナンス改善に有効であることを認識し、湖沼流域の持続的利用に向けた国の取組について提言をまとめました。以上、本ワークショップは、ILBMプラットフォームプロセスがケニアに導入されてからの進捗を確認するとともに、同国の持続的な湖沼管理実現のためILBM-ESSVAを通じていかに現行の統合的水資源管理(IWRM)の取組の中に統合的湖沼流域管理(ILBM)の考え方を浸透させるべきか議論を深める機会となりました。



第12期ILEC科学委員会 始動

ILEC科学委員会は、湖沼流域管理とその保護の分野において世界的に著名な各国の研究者及び行政官等で構成され、当財団の活動を支援し助言を与え、財団のプロジェクト実施において中心的役割を果たしています。2016年3月実施のILEC理事会および評議員会において、第12期目となる新しい科学委員会のメンバーが以下のとおり正式に承認されました。

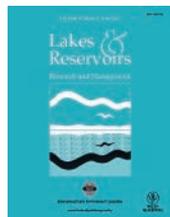
今回は5名の進退を伴う再編があり、

21年間科学委員として財団の活動を多方面から支え、また2007年からは委員長としてご活躍頂いた中村正久教授、15年間にわたりそれぞれの所属地域や世界の湖沼問題に対する精力的な活動を通し委員としてもご活躍頂いたリチャード・ロバーツ博士（カナダ）、ニコライ・アラジン教授（ロシア）、そして9年間在籍し、特に第15回世界湖沼会議(2014年開催)の成功の裏で多大な貢献をいただいたルイーダ・

ナセリフローレス教授（イタリア）は第11期をもって退任されました。以上、数々の功績を残された4名の先生方には、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。なお、中村前委員長の後任としてウォルター・ラスト教授（アメリカ）に新委員長として就任いただいたほか、京都大学大学院より清水芳久教授を新たに委員としてお迎えいたしました。

第12期 ILEC科学委員（2016年4月～2019年3月）

氏名	国籍	所属
ウォルター・ラスト（委員長）	アメリカ	テキサス州立大学 名誉教授／水環境低湿地センター 国際流域研究所 所長
渡邊 紹裕	日本	京都大学大学院 地球環境学 地域資源計画論分野 教授
アデリーナ・サントスボルハ	フィリピン	ラグナ湖開発公社 資源管理開発部 第三部長
サンドラ・アゼヴェド	ブラジル	リオデジャネイロ連邦大学 カルロス・シャーガス・フィリオ生物物理学研究所 教授
ダニエル・オラゴ	ケニア	ナイロビ大学 地質学部教授／気候変動適応研究所 教授
ファン・スキナー	グアテマラ	アティトラン湖環境保全会 副会長
サリフ・ディオップ	セネガル	セネガル科学技術アカデミー 農業科学部門会員
アジット・パットナイク	インド	チリカ開発公社 代表
胡 征宇	中国	中国科学院 水生生物学研究所 副所長
清水 芳久	日本	京都大学大学院 工学研究科附属 流域圏総合環境質研究センター 教授



ILECの科学ジャーナル 「湖沼と貯水池：研究・管理」 最新巻のご紹介

第20巻第3号（2015年9月発行）

頁	論文タイトル	第1著者
139-154	湖沼管理の課題：ビクトリア湖（ケニア）での漁業共同管理実施で学んだこと	Kevin O. Obiero
155-165	ブノット湖開発の課題：サンバプロ市（フィリピン）の7つの湖の中のレッサー湖について	Bing Baltazar C. Brillo
166-181	マラウイ湖流域のILBMを用いた管理への、利害関係者の参加状況	C. L. Chidammodzi
182-186	動水環境の魚類サンプリングのためのノーデンマルチメッシュ刺し網	Arne Fjälling
187-205	トンレサップ湖（カンボジア）：越境水利管理の展望	Mak Sithirith
206-215	Aras 貯水池（イラン）の主要植物プランクトンの環境管理：多変量解析を用いたアプローチ	Fereidun Mohebbi
216-228	貯水池管理のためのシミュレーションモデルの開発と適用	A. hadra

第20巻第4号（2015年12月発行）

頁	論文タイトル	第1著者
231-232	編集委員長からのメッセージ：開催が迫った第16回世界湖沼会議と本誌の新たな役割	Walter Rast
233-242	三峡ダム（中国）における土砂堆積の空間的・時間的な変化	Peng Gao
243-255	学童の環境意識調査に見られるズイワイ湖（エチオピア）の劣化	Hayal Desta
256-263	熱帯貯水池カリバ湖における生息地と漁業が魚群にもたらす影響	Tsungai A. Zengeya
264-274	ベニザケ（Oncorhynchus）の毎漁獲量の推定とそれを左右するボーツフィッシングの要因、およびそれが洞爺湖の管理に与える影響	Emmanuel A. Sweke,
275-284	最小二乗 - サポートベクトルマシンと遺伝的プログラミングを用いたガンガプール貯水池（インド）の水質予測	Mrunalini Shivaji Jadhav
285-299	熱帯湖沼システムに対する WASP モデルの水質予測能力	Sheela A. Moses

科学委員会便り(特別編)

新委員長 就任挨拶

ウォルター・ラスト(アメリカ)



この度ILEC科学委員会の委員長を務めることになり、喜びと共にこれからの活動への期待に溢れています。前任者の中村前委員長は、ILECの使命と目標を押し拡げ、類稀なる功績を残して委員会を去られました。これにより、ILECは世界の湖沼とその他の静水システムに着目した活動を第一線で展開し続けています。過去10年間に発展してきたIL²BM*プラットフォームは、ESSVA/ESSRA**の概念と併用することにより、(先に述べた静水・動水両方の重要な)流域が人類にもたらす生態系サービスの持続可能性を困難にする科学的課題・ガバナンス上の課題を特定し、対策を講じる上で貴重な手法であることがわかってきました。従って、私の主な任務のひとつはIL²BM-ESSVA/ESSRA

を用いた手法の改善と、世界中の静水システムへのさらなる適用を継続していくことになるでしょう。それには上流・下流域の水文学的・法的連携と、それらが体現するガバナンス上の課題に対する特有の考察が伴います。湖沼ガバナンスのアセスメントと改善は、こうした目標においての中心的取組であることに変わりはありません。決して容易な仕事ではありませんが、水と水環境をめぐるグローバルな議論において、湖沼をはじめとする静水システムの重要性に対する認識を向上させるためには欠くことができないものなのです。こうした課題に、私は進んで挑んでいきたいと思っております。その実現のためにも、これまでILECを支えてくださった皆さまのお力添えをいただければ幸いです。

*IL²B M: 統合的静水・動水流域管理

**ESSVA/ESSRA: 生態系サービス共有価値アセスメント/生態系サービス共有リスクアセスメント

前委員長 退任挨拶

中村 正久(日本)

ILECは我が国の重要な課題の一つである環境保全、特に湖沼環境保全に関する国際協力の推進に貢献することを目的として1986年2月に設立され、時期を同じくしてILEC科学委員会も発足しました。今年度末で丁度30年になります。私は故吉良龍夫先生の初代科学委員長退任後を引き継ぐ形で1997年に科学委員に選出され、世界の各地域を代表する他の10数名の委員と一緒に活動することになりました。2005年には多忙だった第2代委員長ヨルゲンセン氏を支援する形で委員長代理職を担うことになり、また2007年には正式に第3代科学委員長に選出されました。従って科学委員として20年弱、委員長として10年強の年月を過ごしたことになります。

委員時代は世界湖沼データブック(後に世界湖沼データベースに発展)プロジェクトやJICA・ILEC湖沼水質保全コースなどの実施支援、ジャーナル「湖沼と貯水池」の発刊支援、ま

たアルゼンチン(1993年)、茨城県(1995年)、デンマーク(1997)、滋賀県(2001年)での世界湖沼会議の運営支援などが主な任務でした。2003年から2005年にかけては、後に統合的湖沼流域管理(ILBM)の概念を形成する契機となった、世界の28主要湖沼流域管理の経験を集約するGEF(地球環境ファシリティ)・世界銀行プロジェクトの責任者として、関係40か国の専門家と組んで活動しました。委員長職就任後は、環境省、外務省、文部科学省、および滋賀大学をはじめとする京滋地域の大学や研究機関等の支援の下で国連環境計画(UNEP)と連携しILBMの概念の実務的な普及を進め、その経緯で前述の湖沼水質保全コースの後継となるILBM研修事業を確立することが出来ました。ILBMはその後ILBM-Heartware、ILBM-ESSVAなどといった概念や方法論に展開しつつあり、さらに国連機関との連携プロジェクトとしては越境水域評価プロジェクト(TWAP)やケニア、インド、マレーシアをはじめとする多くの国々におけるILBMの普及・発展にも繋がっています。またこの間にインド



(2007年)、中国(2009年)、アメリカ(2011年)、イタリア(2014年)で開催した世界湖沼会議の成功の裏で、各国政府や自治体の積極的な支援を得ることができました。

この度、ILECの活動を将来に向けてさらに発展させるべく、科学委員会メンバーの一部交代と併せて委員長職を退くことになりましたが、こうした一連の活動に従事できたことを大変光栄に思っております。関係者および関係機関には長年にわたりご支援いただき、心から感謝とお礼を申し上げます。

元JICA研修員からの便り

ベラド・フェリダ (モロッコ)

今回は、2013年度のJICA研修「湖沼環境保全のための統合的湖沼流域管理コース」にモロッコより参加したベラド・フェリダ博士からの便りを紹介します。

私が本欄への寄稿を考えたとき、統合的湖沼流域管理(ILBM)についての研修体験、すなわち学んだことがらやそれら全てが私にとっていかに有益であったかを記そうか、あるいはモロッコに戻ってから実際になしえたことについて書こうか、迷っていました。他の研修員の方々の記事を読んでも、私の場合、本当のところ、共有できるようなはっきりとした成果を得ていないと思っています。しかし、(研修のコースリーダーであった)中村先生が、ILBMの概念や枠組みを導入しても、すぐに劇的な変化を作り出すことはできないと言われたことを思い出し、執筆しました。

私のアクションプランは、北モロッコのタンジェーテトゥアン地域に建設中の複数のダム流域の管理に関する一種の祈りに過ぎなかったのではないかと考えています。たしかに、アクションプランを提案すること自体が見栄を張ったものだったかもしれません。というのも、流域管理は多くの利害関係者の責任の下で行われるものでありますが、私が所属している部門は、管理計画を策定し、実行するための調整を行っているだけだからです。(注：博士は、モロッコ北西部に位置するリーフ地方の水森林砂漠対策部に所属し、主にダム貯水池の流域管理研究等を担当しています。)アクションプランの作成は、将来の湖沼の周りの全ての資源の持続的かつ統合的な管理のために、前もって最良の環境を作り上げるユニークな機会であると思いましたが、



オリーブミルにより汚染された河川

今でもそのように信じています。アクションプランは、良好な水質を確保し、滞泥による水量損失を防ぐだけでなく、上下流の人々の発展を促すべきものであります。モロッコのような国では、水資源は希少で貴重な資源であることは言うまでもありません。その資源を守るためにも、ILBMは大変良いアプローチのように思えるし、私の理解では、ILBMの6本の柱は常に相互につながりがあるので、繰り返し用いられるものでありましょう。レポートには、多様な利害関係者を協働へといざなうための現状分析、協働が機能しない理由や行動計画などを書きましたが、それはまだ途上にあり、さらに時間と労力を必要とします。その目標は、完了したあかつきには、これらの流域の一つにデモあるいはパイロットサイトとしての一つのプロジェクトを置くことです。このレポートは、モロッコの森林政策(流域部門)に対する新しいEU支援プログラムから支援を受ける可能性があります。

さしあたって、私は地域で開かれるワークショップや会合に参加した時や、大学においてILBMに関する発表を行う時には、常にこのアプローチについて、特に汚染の危険性について声を大にして述べようとしています。しかし、私が受ける反応は、学生や教師らは、水と水理学に関したモデリングや技術的な話により興味を持っているというものです。私は、自然資源管理においてはガバナンスが根本となることを強調するためにも、我がスタッフや研究者を対象としてILBMの研修を行うことを検討しています。最後に二つの点について述べたいと思います。第一点は、自治会の概念に心を動かされ、私の町の流域を管理するために共同体の精神を導入してみたいという点です。第二点は、オアシスについてです。そこでは、灌漑システムや水の分配に関する伝統的な取り決めやノウハウが壊れつつあり、人々や環境に対し、汚染が深刻な問題を起こしています。その解決策は非常にシンプルであり、全ての利害関係者が一堂に会し、協働する道を見出すことであると考えます。



フェリダ博士 (タンジェーテトゥアン地域の貯水池にて)

ILECの活動概要 (2015年度下半期)

- 10月
 - 18日 ラムサールびわっこ大使第3回事前学習会を開催 (大津市・草津市)
 - 22日 HIDAのプロジェクトでインドより来日の専門家9名がILECを訪問 (草津市)
 - 22日 滋賀県立守山高等学校の生徒、教師4名がILECを訪問し、JICA研修員と交流 (草津市)
- 11月
 - 8～19日 グリーン成長に資するハロン湾支援プロジェクトに参加 (クアンニン省)
 - 19日 テレビ会議による琵琶湖・トラジメノ湖交流会を開催 (草津市・ペルージャ)
 - 21～24日 ラムサールびわっこ大使事業国際交流会を実施 (チェンマイ)
 - 24～26日 ILBM-ESSVA ワークショップを開催 (キスム)
 - 25日 日本・アジア青少年サイエンス交流事業を実施 (大津市・草津市、12/2迄)
 - 26日 国連環境計画 (UNEP) 本部および在ケニア日本大使館訪問 (ナイロビ)
 - 29日 パネル討論会「水と農業と地球環境問題」にILECポスターを展示 (京都市)
 - 29日 マレーシア・ハートウェアプロジェクトサイトを視察 (クアラセランゴ) 【写真1】
 - 30日 アジア圏科学委員会ミーティングを開催 (プットラジャヤ)
- 12月
 - 1日 WLC16プレ会議に出席 (プットラジャヤ)
 - 2日 WLC16準備会合を開催 (バンドン)
 - 3～6日 WLC16コンサル訪問として、チタルム川流域およびトバ湖を視察 (バンドン・パラパット・サモシール島) 【写真2】
 - 7～26日 グリーン成長に資するハロン湾支援プロジェクトに参加 (クアンニン省)
- 1月
 - 26～27日 流域政策研究フォーラムを開催 (大津市)
- 2月
 - 6日 連続講座「日本一の湖、琵琶湖に学ぶ環境と暮らし」を開講 (草津市・大津市・近江八幡市・高島市、3/11迄) 【写真3・4】
 - 13日 ラムサールびわっこ大使事業報告会を実施 (草津市) 【写真5】
 - 13～16日 ILBMハートウェア国際専門家会議に出席 (シムリアップ)
 - 17日 WLC16のPRのためカンボジア政府機関を表敬訪問 (プノンペン)
 - 21日 ふなずし交流会に参加 (草津市)
- 3月
 - 4～23日 グリーン成長に資するハロン湾支援プロジェクトに参加 (クアンニン省)
 - 12～13日 世界農業遺産シンポジウム、SATOYAMAイニシアティブ推進ネットワーク連絡会議等に出席 (能登)



さくらサイエンスプラン交流事業の実施

2015年11月25日から12月3日の10日間にわたり、国立研究開発法人 科学技術振興機構 (JST) からの助成を得て、日本・アジア青少年サイエンス交流事業 (さくらサイエンスプラン交流事業) を実施しました。中国・湖南省は、洞庭湖や湘江等の河川を擁し、琵琶湖を預かる滋賀県と30年以上に渡り友好関係にある省です。この湖南省より湖南師範大学の教授

や附属小中学校の教師等8名を迎え、ILECが受け入れ機関となり滋賀大学環境総合センターや滋賀県の協力による講義、滋賀県の水環境ビジネスを支える企業の訪問等、産学官連携による体制で日本の優れた科学技術や滋賀県、日本の環境教育について紹介し、関係者との交流を持ちました。今回の交流が、湖南省における科学技術や環境教育の更なる発展に

つながることを願っています。



世界に羽ばたけ、びわっこ大使!

② チェンマイでの交流会編

2015年11月22～24日に、タイ王国のチェンマイにてラムサルびわっこ大使事業の国際交流会が開催されました。滋賀県からは6名の大使たちが派遣され、現地の大学や小学校にて「湖食文化」をテーマに研究者や児童等と交流を深めました。交流会の目玉は、これまで琵琶湖周辺で勉強会を重ねてきた成果（詳しくは前号掲載の「①事前学習会編」をご覧ください）を大使たち一人ひとりが発表したプレゼンテーションでしたが、現地入りしてからも一生懸命練習を重ね、見事5回にも及ぶ発表に自信たっぷりの表情で臨みました。また、滞在中は現地で調達した食材を使ってあら汁や炊き込みご飯、天ぷらなどの日本食を調理し、現地の児童たちが作ったタイ料理との食べ比べも行いました。自分たちで作った料理の味は満点だった



命練習を重ね、見事5回にも及ぶ発表に自信たっぷりの表情で臨みました。また、滞在中は現地で調達した食材を使ってあら汁や炊き込みご飯、天ぷらなどの日本食を調理し、現地の児童たちが作ったタイ料理との食べ比べも行いました。自分たちで作った料理の味は満点だった



ようで、タイの子どもたちにも大好評でした。初めて味わう本場のタイ料理も堪能し、そのルーツや「なぜ辛いのか」など、現地の先生に質問し熱心に食文化を学んでいました。忙しくもかけがえのない体験をとおして充実したチェンマイ滞在を終えた大使たちは、皆笑顔で無事に帰国しました。

2016年2月13日に開催した事業報告会では、大使たちが滋賀県副知事、家族、ほか関係者に一年間の活動を紹介したほか、自ら半年前に漬け絶品に仕上がったふるさと滋賀の伝統料理、フナずしをふるまいました。大役を見事にこなした大使たち、この一年の活動を通して以前よりも環境問題に興味を持つようになったとのことで、今後の活躍に期待しています。

ご寄付・ご協力ありがとうございます!

- 平成27年度に寄付のご協力をいただいております企業・団体様のご紹介（順不同）



- 平成27年度に賛助会員（法人）として会費をいただきました企業・団体様のご紹介（一口3万円：二口以上の会員様のみ）（順不同）



ILECの活動へのご理解とご支援を賜りたく、当財団では寄付のご協力および賛助会員へのご入会をお願いしております。寄付金、賛助会費には税制上の優遇措置が適用されます。詳しくは www.ilec.or.jp/jp/advertise をご覧ください。

INTERNATIONAL LAKE ENVIRONMENT COMMITTEE FOUNDATION (ILEC)



〒525-0001 滋賀県草津市下物町1091 公益財団法人 国際湖沼環境委員会
— 事務局 — Tel: 077-568-4567 / Fax: 077-568-4568 / E-mail: infoilec@ilec.or.jp
Website: www.ilec.or.jp / Facebook: www.facebook.com/ilec.japanese

*本ニュースレター最新号、バックナンバーは上記の当財団ホームページでもご覧になれます。